

ボランティア通訳翻訳者のための 必須基礎知識提要

Essentials of Fundamental Knowledge of Interpretation and Translation for Volunteer Cohorts

英米学科
大森裕實
Yujitsu O'MORI

緒言

本稿執筆の契機は、(財)愛知県国際交流協会(神田真秋会長[前愛知県知事])から依頼を受けた「平成 29 年度ボランティア研修会《通訳・翻訳講座》」の講師として 2 回の講演「《通訳》《翻訳》に関する理論と実践」(2017.12.07 及び 2017.12.16)を行なったことにある。当該講演のための新しい試みとして、袖川裕美准教授(BBC ワールドニュース放送通訳者/本研究所通訳研究・実践部門長)とトークショーを行なう形で、日頃から確認しておきたいと思っていた事項について経験豊かなプロ通訳者の視点からの回答を引き出すことにより、ボランティア通訳翻訳者にとって欠かすことのできない基礎知識及び予備的心構えを提示することができた。

本稿はその講義資料を基に、通訳翻訳者(主にボランティアまたは初心者)にとって必須と思われる基礎知識及び最新の学会発表や講演で得られた情報をまとめたものであり、当該分野にとって一種の「テキスト」の役割を果たすことも意図されている。

1. 《通訳》に関する基礎知識と実践

1.1 通訳の種類と概要

ここでは、小松(2005: 3-8)に依拠し、袖川准教授及び本稿筆者の経験的知識に基づき、通訳業務をカテゴリー化して提示する。

①通訳方式に基づく分類

「逐次通訳」(Consecutive Interpretation)——通訳の基本。話し手の発話を区切って、順次通訳していく方式。日本の場合、1 区切りは 20~60 秒程度(欧米ではもっと長い)。通訳技術の 3 要素である「理解」「リテンション(記憶とノートテイキング)」「表現」が相対的に識別しやすいため、通訳訓練に適している。

「同時通訳」(Simultaneous Interpretation)——通訳の中の花形。第二次大戦後のニュールンベルグ裁判で初めて公式に会議通訳として採用された。通訳者は専用ブースで当事者の発話を聞きながら同時に通訳するが、話の内容理解が必要になるため、実際には 3~10 秒のズレが生じる。この時間的ズレ幅を EVS(Ear-Voice-Span)という。言語間の距離が大きい場合には、このズレの克服が課題となる。欧米ではプロ通訳の約 90%は同時通訳。

- 「ウィisper通訳」(Whispered/ Whispering Interpretation)——上掲の「同時通訳」の一種だが、専用ブースに入らず、被通訳者の耳もとで囁くように通訳する。フランス語に由来する *Chuchotage* とも呼ばれる。意思伝達のサポーター的役割も演じる。
- 「リレー通訳」(Relayed Interpretation)——複言語が使用される国連会議やサミットの場面で、Source Lang.から Target Lang.に直接通訳せずに、いったん共通言語に通訳されたものからリレーして通訳するもの(例えば、ロシア語⇒英語⇒日本語)。この場合、リレーの中軸となる言語を Pivot Lang.と呼ぶ。
- 「サイトラ」(Sight Translation)——話し手のスピーチが原稿に基づく場合に、事前に入手された原稿に基づき通訳するもの。事前準備に十分な時間が割ける場合と、会議直前に原稿がもたらされて、準備時間が不十分なまま、通訳者の技量が問われる場合もある。

②通訳形態に基づく分類

- 「会議通訳」(Conference Interpreting)——国際会議、外交交渉、国際シンポジウム、セミナー、講演会などで活用される最も典型的な通訳。通訳方式は、同時通訳の他、逐次通訳、サイト・トランスレーションも含まれる。AIIC (Association Internationale des Interprètes de Conférence) という国際会議通訳者協会がジュネーブ(スイス)に在る。
- 「ビジネス通訳」(Business Interpreting)——上掲「会議通訳」と明確に峻別することは難しいが、特に民間企業において行なわれる通訳を意味する。この通訳では、企業に所属する通訳者が担当する場合と、企業から依頼された外部プロ通訳者が担当する場合がある。
- 「コミュニティー通訳」(Community Interpreting)——地域に住む外国人の数が急増する昨今、公共サービス(特に、医療、福祉、教育)において必要性が拡大している通訳分野。「リエゾン通訳」(Liaison Interpreting) や「対話通訳」(Dialogue Interpreting) とも呼ばれる。ボランティア通訳が活躍する主領域でもある。ビジネス通訳の中で難易度の低い随行通訳やレセプション通訳もこの一種と見なされる。
- 「放送通訳」(Media Interpreting)——テレビやラジオ放送で使われる通訳。日本では、アポロ 11 号の月面着陸の同時中継で世間の注目を浴びた(1969.7.20; 通訳は西山千、國弘正雄、村松増美、小松達也等)。衛星放送及び二ヶ国語放送の発達により、特に、湾岸戦争(1991.1.17)の 24 時間体制の CNN ニュース報道等で威力を発揮した。スピーチや記者会見は通常の会議通訳と同じだが、定時ニュース番組では録画を事前視聴して行なうため「時差同通」と呼ばれることがある。
- 「法廷/司法通訳」(Court Interpreting)——法廷や関連施設(警察や拘置所)における通訳。米国では各州に「法廷通訳者」という資格制度がある。日本でも最近需要の高まっている分野。第二次大戦後のニュールンベルグ裁判のように同時通訳が主流だが、日本の極東軍事裁判の場合は逐次通訳で行なわれた。日本では、日本語—英語間の他に、南米スペイン語、ブラジルポルトガル語、中国語、タガログ語、タイ語、ベトナム語、インドネシア等の通訳者の増強が求められている。
- 「医療通訳」(Medical Interpreting)——上掲の「コミュニティー通訳」の一種だが、総合診療等、人間が行なう通訳に代わって自動翻訳機器の活用が期待される分野でもあ

る。

「手話通訳」(Sign Language Interpreting)——音声モードの通訳に加えて行なう、視覚モードの通訳。医療や福祉分野での手話通訳の必要性に加えて、記者会見、報道番組、シンポジウム、公開講座等公共性の高い場面における手話通訳も重要度を増している。

1.2 通訳者の役割とその黒衣(黒子)度

通訳が自己“**I**”を滅却して、依頼人の“**I**”に徹する業務であることはつとに知られた事実ではあるが、ボランティア通訳に対する苦情で一番多いものは「もたもたしている」「プロ意識に欠ける」を抑えて、「外国人ゲストとの勝手なおしゃべり」であることを再確認しておきたい【新崎(2001: 5)】。これは「エスコート」と「通訳」の区別や切替えができていないことに起因する。「通訳の本質は黒子に徹するということだ」——卑近な言い方をすれば、「会議の出席者が通訳の存在を意識せずに自然なディスカッションができて、後で振り返った時に相手の外国人の印象は強いが通訳のことはほとんど覚えていない、というのが最も上質の通訳と言うべきなのである」(新崎2001: 9)。譬えて言うなら、ゲシュタルト心理学で説明される「ルビンの杯」のようなもので、依頼者と通訳者は同時間に同場面に存在しているが、受け手が何を前景化し、何を後景化して認知するかによって、通訳のシルエットの浮き沈みがあるということではないか。

しかしながら、何十年も黒衣(黒子)に徹することはEgoの発達した通常の成人にとっては至難の業であり、通訳者自身の知識や経験が増すにつれて、「こうした場面はこう表現した方が好いのに」や「こんな言い方は誤解を招くのに」といった所感を押し殺すことが難しくなり、ついつい自分自身が前面に出てしまうようになると、それは通訳としての引退時期だということをかかつて國弘正雄氏は語っている。

それでは、通訳としての黒衣(黒子)度と白衣(白子)度が融合したフェジーな領域は存在しないのだろうか。実は、第1節で記述した「ウイスピー通訳」がその分野に相当するのではないかとと思われる。「ウイスピー通訳」は依頼人に寄り添う「コミュニケーション通訳」ともいうべき存在で、その意味では依頼人のブレインとしての存在になりがちである。事実、アポロ11号の月面着陸同時通訳¹⁾で名を馳せた西山千(1911-2007)は駐日米国大使E. O. ライシャワー(在任1961-64)の個人通訳としてブレイン的存在であったと言われ、同様に、國弘正雄(1930-2014)も第66代総理大臣三木武夫(在任1974-76)の外交ブレイン(外務省参与)として活躍した。古くは、第45代及び第48-51代総理大臣吉田茂(第一次内閣在任1946-47;第二次～第五次内閣在任1948-54)の私設秘書を務め、GHQとわたり合った白州次郎(1902-85)の名が想起される。

1.3 通訳の Accommodation

本節の表題とした Accommodation の意味するところは「聞き手にとってわかりやすい通訳とは何か」ということに尽きる。

①EVS(Ear-Voice-Span)「聴取—発話間隔」

EVS とは、通訳者が当該発話内容を耳で聴いて、その訳を声に出すまでの時間間隔(ズレ)を意味する。同時通訳では、話し手の発言が始まると間髪なくフォローして訳出していく必要があるが、現実には、話し手の発言の意味と方向性をある程度理解してからでないと訳出できない。例えば、“I think living in Japan is obviously very different from living in Australia....”

という発言は、下線部を聴くまでは訳出に入れず、少し遅れて「日本に住むということは…」と始まることになる [小松(2005: 104)]。

この EVS を決定するのは“unit of meaning”であり、これには言語特性が反映する。例えば、“In Australia, you can't go anywhere / without a vehicle, /...”という発言では、英語とフランス語間通訳では前置詞 without の前で意味単位を括ることができるが、英語と日本語間通訳では、前置詞句の後まで含めないと意味単位を形成することができない [小松(2005: 105)]。

英語と日本語というような言語間距離の大きな通訳の場合に EVS が長くなることは不可避であり、これを克服する通訳技能としては Waiting 及び Anticipation が求められる²⁾。これを無視して、無理やり早口でまくし立てるような訳出は、たとえ情報量が多く正確であっても、聞き苦しさを惹起することになる。

②Mental Model / Mental Representation (心的表象)

メンタル・モデルは同時通訳において最も重要な認知過程であり、通訳作業の流れ (Comprehension「理解(Source Language)」⇒Retention「リテンション」 [memory & note-taking]⇒Re-expression / Re-formulation「再表現(Target Language)」)において、「理解」と「再表現」の中間に位置する現象であると考えられる。これを「イメージ化」(Visualization)と呼んでもよい。話し手の発言の片言隻句を記憶するというよりは、脱言語化(de-verbalization)して、頭の中に一枚の絵のような具体的なイメージを描くことができれば、それを基づいて、通訳者が自分自身の言葉で表現することが可能となる——これこそが理想的な通訳過程である。

このことは外国語学習・教育にも通底する認知過程であり、Text (書かれたり発話された文)を理解するには、その Text が産出された背景にある Context (脈絡、状況)を具体的にイメージして、それを頭の中で再構築することが必要な作業となる。この脳内のイメージ化こそが「解釈」(Interpretation)そのものであると言っても過言ではない。

③新崎隆子「聞き手の視点から見た同時通訳と逐次通訳」(日本通訳翻訳学会第 18 回大会 2017.9.9)の意味するところ

通訳というものは、送り手(Interpreter / Addresser)の視点からその有効性が論じられることが多いが、受け手(Interpretee / Addressee)の視点に立って「わかりやすい通訳とは何か」を改めて認識させてくれる研究発表が新崎隆子(東京外国語大学講師/放送通訳の草分け的存在)によってなされた。新崎(2017)に基づき、その内容を簡潔にまとめておく³⁾。

同女史による調査の動機は「通訳の質を評価するのは聞き手である」とする信念に在る。同時通訳と逐次通訳の忠実性に関する比較研究は、Gile(2001)に依拠すると、「同時通訳の方が逐次通訳よりも正確である」という結果が得られているが、それは通訳の専門家の評価であって、利用者の評価ではない点に疑問が残る。そこで、同時通訳と逐次通訳の有用性に関する調査を行なうこととし、「日米首脳共同記者会見のオバマ大統領の冒頭発言と最初の質問に対する答え(2016年5月25日)の同時通訳と逐次通訳」を素材として、一般視聴者8人(男性6人、女性2人)と通訳専門家5人(通訳訓練・実務経験合わせて10年以上)による評価実験を実施した。その結果、量的分析としては、(1) 視聴者は同時通訳よりも逐次通訳の方が分かりやすいと感じる傾向があること、(2) 視聴者は同時通訳よりも逐次通訳の方が原文に忠実だと判断する傾向があること、(3) 専門家は音声評価でデリバリーを重要視する傾向があること、(4) 専門家は、音声評価よりも忠実性評価の方がばらつきが少なく、逐次通訳と同時通訳の差を視聴者よりも少なく感じていることが分かった。最終的な考察として、「視聴者が同時通訳よりも逐次通訳を支持した理

由」は、(1) 日本語の構文が自然で違和感がない=頭からセグメントごとに切って訳す「同時通訳調」に慣れていないこと、(2) 十分に内容を理解できる時間を与えられたこと(逐次通訳の時間は同時通訳の 1.5 倍)、(3) 通訳の技術的な難しさを考慮せず、純粋に「分かるかどうか」を優先したことに存する。一方、「専門家が同時通訳を視聴者よりも高く評価した理由」としては、(1) 同時通訳の難しさを知っており、逐次通訳に対する期待が高いこと、(2) デリバリーを重要視=フィラーの少ない同時通訳を評価し、繰り返しの多い逐次通訳には厳しいこと、(3) 特に、評価 1(通訳の音声聞いて「内容」と「デリバリー」を 5 段階評価)では「自分と比べてどうか」という視点から評価した可能性があることを指摘することができる。結局、通訳を利用する時には、同時通訳と逐次通訳の長所と短所を考慮して、使い分ける必要があるという帰結に落ち着く——同時通訳の特性は、(1) 時間的な効率性が高いこと、(2) 時間が限られている時や質疑応答のように速い反応を求められる時、ニュースや挨拶など内容が分かりやすいものに望ましいこと、(3) 完璧に近い同時通訳ができれば、それが通訳の理想であることが挙げられ、他方、逐次通訳の特性は、(1) じっくりと内容を聞きたい時に望ましいこと、(2) 原発言の言語が分かる場合は通訳者に全面的に依存する同時通訳よりも満足できること、(3) 時間的に余裕のある逐次の方が正確であること、(4) 話し手としては内容を確認して答える時間を稼げるので安心であること、(5) 自分の言いたいことを深く理解した上で聞き手に伝える工夫をしてもらえること等が挙げられる。

1.4 サイトラ(Sight Translation)研究最前線

日本通訳翻訳学会では、サイトラ研究を推進すべく、サイトラ・プロジェクトを立ち上げて、毎年研究報告を行なっている。

サイト・トランスレーション(通称「サイトラ」)は、話し手が予め準備した原稿を読む場合に行なう通訳であり、公式会議ではこの形式が多く、同時通訳の場合も逐次通訳の場合もある。サイトラ技術は会議通訳者にとっては重要である。

また、サイトラは言語転換という知的作業の点で通訳者養成のトレーニングにとって欠かせない [小松(2005: 84)]。同時に、サイトラは日本の英語教育における読解能力の涵養とも密接につながっている。英語教育では、英語のような SVO 型言語を日本語 SOV 型言語に転換するという「語順の壁を越える試み」を明治期以来行なってきた——「訳読」(漢文訓読方式)⇒「直読直解」(漢文素読方式)⇒「翻訳」(原文の流れ読み)⇒「通訳」(時間的制約と順送り)。

いわゆる「スラッシュ・リーディング」は《英文解釈》、「サイト・トランスレーション」は《口頭翻訳・通訳訓練》、「サイト・インタープリテーション」は《原稿付き通訳》と関係する。

サイトラの認知システムは、当該文の①分割⇒②保持⇒③組換えを連関する同時プロセスとして行なうところに特徴がある。

1.5 スピーチ・レベルと言語的文体論(Linguistic Stylistics)及びレトリック(Rhetoric)

政府の公式会議、ビジネス会合、学会シンポジウム、公開講演会、レセプション、街頭インタビュー等々、そこで使用される語彙や文体はさまざまである。専門的な言い方をすれば、スピーチ・レベルが異なるということである。それでは、そうした場面での発言を通訳する場合に、それに相応する日本語に訳出するよう心掛けるべきなのだろうか。経験則では、そこまで思い巡らす余裕が通訳者にはないということである。ドナルド・トランプ米国第 45 代大統領の発言が(意図的に)粗野であるとしても、それを粗野な日本語に(意図的に)訳出するということはない。“同時通

訳の神様”との異名を取った國弘正雄は、ブッキッシュで(堅苦しい)四字熟語(漢語的表現)を多用した通訳を行なうのが常であったが、それは話し手のスピーチ・レベルと合致していても、聞き手のスピーチ・レベルとは相容れない場合もあったのではないか。それにもかかわらず、國弘流は理にかなっている。大和言葉のほうが易しくて分かりよいというものだが、おのずから長くなる。通訳の発言のほうが原発言より長いというのは不自然であろう。そこで、漢語的表現と大和言葉的表現が混淆している訳出が、聞き手側の心地よさを誘発することになる。英語でも、少し気取って *bon voyage* や *savoir faire* といったフランス語を散りばめてみるようなものではないか。他方、映画字幕(Superimpose)のように、字数制限のある訳は物足りなさを惹起するのだから、訳出の長さの適否は容易には決められない。

ところで、英語学・言語学の観点からは、英語の文体的特徴として、名詞句表現の多用を指摘しておきたい。英語の名詞句表現は、概念を凝縮化してコンパクトな食べやすいものに仕立て上げて、相手に送り出す表現手段である。従って、次の事例に見るように、いったん解凍して、それを動的表現にしなければ十分に咀嚼できない。すなわち、英語から日本語への通訳・翻訳の場合、静的表現を動的表現に転換する作業が訳出には求められる。ただし、翻訳の場合には時間があるため、この種の改訂が可能であるが、通訳の場合には時間的制約が課せられるため難しい作業であることは否めない。

事例1 “... that if near-natives have the same knowledge as that exhibited by natives, the existence of UG constraints on L2 acquisition is confirmed; ...”
「もし近似ネイティブが真ネイティブが示すのと同じ知識をもっているとすれば、第二言語習得上に普遍文法制約の存在が確かめられるのである」⇒(動的表現に転換)「...第二言語習得を制約する普遍文法の存在が確かめられる...」
[大森(2013: 69)]

事例2 “... this apparent ‘cultural difference’ lies not in ..., but in differences in the structuring of situations and participant roles”
「この明らかな“文化的相違”は ... にあるのではなく、状況と(会話の)参加者の役割の構造の違いにあるのだ」⇒(動的表現に転換)「.....、状況と(会話の)参加者の役割を構築する際の違いにあるのだ」
[ibid. 69]

さらに、修辞学(Rhetoric / 人を説得するための術 Arts)の視点からは、転位修飾(Transferred Epithet)も、英語の静的表現から日本語の動的表現への転換を要する言語現象であることを指摘しておきたい⁴⁾。

かつて夏目漱石は、煩悶を繰り返した英国留学において、進化論の呪縛から解放された境地を「私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めることができた」と『私の個人主義』(学習院での講演録)の中で記したが、その英訳“the gloomy city of London”は「転移修飾」と呼ばれる言語現象である。同様に一般的な事例として、“I drank a hasty cup of tea.” [= I drank a cup of tea hastily.] も指摘されることが多いが、そのような言語表現に関心を払うことなしには、英語圏のいわゆる一定水準の教養のある人々(Educated People)がもつ英語らしさを感じ得することは到底望めないであろう。また、最近再発見した英語文に“This pleasure ..., and has nothing to

do with any desperate need of your own.” (B. Russell, *The Conquest of Happiness*, 1930) というものがあつたが、これも下線部は[with what you need desperately]と解釈し訳出するのが自然である。もつとも、desperate need(死に物狂いの必要性)と聞いても、言語学者や辞書編纂者でもなければ、それほど連辞関係(統合関係)に不自然さを覚えることは少ないが、通訳者や翻訳者の場合にもこの趣の言語表現に当意即妙に対応する感性が求められていることは言を俟たない。

1.6 人工知能(AI)の発達と自動音声翻訳の進化

1.6.1 藤田篤(情報通信研究機構・先進的音声翻訳研究開発推進センター・先進的翻訳技術研究室主任研究員)による通訳翻訳研究所定例講演(2017.12.20)に基づき、自動音声翻訳開発の最新事情について説明する。

機械翻訳の歴史は 1950 年代後期の露英翻訳に遡ることができるが、当時はロシアが米国に先行しており、この黎明期はスプートニック危機と呼ばれる。やがて、欧米の機械翻訳技術開発は日進月歩を遂げ、2000 年代に入ると、大規模集積対訳データベースの整備とコンピュータの処理能力の向上により、最適の翻訳文(語句配列)を産出する SMT 方式(統計機械翻訳)が開発され、飛躍的に精度が向上して、実用に堪えられるものに進化した。現在では AI(人工知能)の発達により、NMT 方式(ニューロン機械翻訳)が脚光を浴び、システム自体がエラーを修正する学習機能を備えるようになった結果、機械翻訳に明るい将来像を描くことが可能である。人間が関与する部分は、機械翻訳が容易となる文構造に整形する前編集や後編集に限定されるかもしれない——その意味では TRADOS など不要になる可能性もある。自動翻訳ソフトとして @TexTra[®]が開発され、続いて、多言語音声翻訳アプリとして VoiceTra[®]が開発されたが、いずれも無料で広く提供されている。現行の VoiceTra[®]には、英語の他、中国語、韓国語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語、ミャンマー語、ブラジル・ポルトガル語が双方向型フルスペック実用版として利用が可能となっていることは興味深い。これからいっそうの活用が望めるであろう。

1.6.2 長瀬友樹(株富士通研究所・人工知能研究所・ナレッジ活用 PJ 主管研究員)による通訳翻訳研究所定例講演(2018.1.17)に基づき、医療機関における自動音声翻訳機器の実用化に関する最新事情について説明する。

最近では医療機関(病院)を訪れる外国人患者の数は急増し、多様性も増している実態が顕著に認められるが、そうした人々の相談や要求に十分対応できる医療従事者は多くはない。その場合、医療通訳士の配置及び活用が望まれることは言うまでもない。しかし、多様な言語対応の問題や勤務時間等の問題があり、それらの解決のためには、人間の技能に頼らず、音声翻訳技術の応用及び実用化が焦眉の急となっている。医療現場では片手で音声翻訳端末を操作することは難しいため、ハンズフリーで駆動するタブレット型端末やポケット型端末を開発し——医療従事者の日本語音声方向と患者の英語音声方向により AI 技術でそれを識別し、自動音声翻訳を可能にした——東京大学附属病院を中核に臨床試験(実際の医療従事者と患者への適用;主に総合案内と採血現場)を行なった結果、良好な結果が得られた。もちろん、課題も少なくはない——例えば、英語やスペイン語であっても、多様な変種が存在するため、非標準変種に対して翻訳エンジンの開発が不十分な現状がある、また、医療過誤を惹起する可能性のある複雑で専門性の高い会話には対応できない。その意味において、AI 技術はあくまでも人間が行な

う音声翻訳の補助に過ぎないことに十分に留意して、それを過信しない視点を持つことも重要である。

1.7 ボランティア通訳者のための7つの心得

- ① 通訳上達のためには「(依頼として)来るもの拒まず」のチャレンジ精神を持つべし——場数を踏むこと(経験)が何よりも大事。外科医が失敗して技術を上達させるのと似たり。通訳の現場は一種の乱取り稽古のようなものと心得よ。経験知は自分に対する自信と安心感を与えることになる。
- ② 資料の事前入手と準備をおさおさ怠るべからず——情報は適正な量に留め、通訳内容が想定外であっても、いったん引き受けた仕事は断らないこと。
- ③ 常に自主トレに励むべし——あれもこれもと手を広げずに、1つのテキストや1つの講座に集中して、それを完璧にこなす方が効果的である。
- ④ ボランティア通訳は過酷な仕事だと肝に銘じよ——プロ会議通訳は2名体制で、15分程度で交代する(二言語通訳の場合、言語による役割分担をせずに、公平性のため時間で切る)が、仲介エージェントの入らないボランティア通訳の場合、依頼主からの要求はかなり厳しいことが多い。生半可な気持ちではできない。
- ⑤ 言葉よりも意図を伝えよ——話し手にはそれぞれクセがあるので、分からない場合には「もう一度言ってもらいたい」と率直に伝え、それと誠実に面と向かうことが信頼を獲得することにつながる。通訳を介したコミュニケーションは群舞である。
- ⑥ 通訳のRewardは金銭では計れない——通訳終了後のちょっとした言葉(ありがとう、よかったよ等)やウインク程度の謝辞で充足感が得られるものである。依頼主サイドからの軽い批評やアドバイスも歓迎。
- ⑦ 通訳には誤訳はつきものだと心得よ——上級者であれば、通訳の途中で何気なく軌道修正することにより失敗を取り戻すことはできるが、そうでなければ、しっかり訂正することが誠実な通訳というものである。

2. 《翻訳》に関する基礎知識と実践

2.1 A Variety of Terminology ——翻訳・義訳・直訳・意識——

ここでは、斎藤(2007: 134-6)及び中村(2016: 19-21)に基づき、表題に掲げた4つの術語の概念を整理しておくことにする。

- ① 「翻訳」(杉田玄白『解体新書』(1774)の凡例に依拠)——ある原語に対して、それに相当する日本語を充てること。例えば、和蘭語の「ベンデレン」を和語「骨」と訳すこと。
- ② 「義訳」(杉田玄白『解体新書』(1774)の凡例に依拠)——ある原語に関して、その意味を汲み取って、新しい概念を表わす言葉を創作すること。例えば、和蘭語の「カラカベン」では「カラカ」が「軟らかい」の意味で、「ベン」が「ベンデレンの省略」で「骨」の意味であると理解できた結果、「軟骨」と訳すこと。
- ③ 「直訳」(杉田玄白『解体新書』(1774)の凡例に依拠)——ある原語に対して、それに相当する日本語が充てられない場合に、その音だけをそのまま日本語で表記すること。いわば「音訳」(外国語の音を漢字で表記)である。例えば、和蘭語「キリイル」を漢語「機里爾」と訳すこと。

- ④ 「意識」(外山正一『英語教授法』(1897)の「翻訳の仕方」に依拠)——意識は原文の妙味を無視して、ただ原文の意味を訳出するだけの、極めて容易な訳法である。例えば、“Their opposites are all but impossible.”を「その反対はほとんど想像すること出来がたし」と訳せば意識だが、「その反対というものは想像することもできぬといわんばかりでした」と訳せば、all but の趣意を失わない直訳となる。ここでは、直訳は原語の構文に忠実な不自然な日本語というニュアンスを持たず、むしろ忠実に原語の意味を反映した訳という定義になり、意識とは対峙する概念であることが明らかである。

2.2 翻訳の技術(Translation Techniques)

これに関して、斎藤(2007)は有益な情報を提供してくれる。紙幅の制約上、詳述できないが、項目を列挙して、どのような事柄が(特に文芸翻訳の)翻訳技術として扱われるべき射程に含まれるかを提示しておきたい。

- ① 文脈を把握すること／②読者のことを考えること／③自然な日本語を使用すること／④単語や品詞を組み換えること／⑤意味素・意味成分を組み換えること／⑥臨機応変に処理する技術

2.3 言語教育・学習としての翻訳(Translation as a Means of Language Teaching & Learning)

これに関しても、斎藤(2007)は有益な情報を提供してくれる。紙幅の制約上、詳述できないが、項目を列挙して、翻訳のどのような側面が語学の教授及び学習の方法として扱われるべき射程に含まれるかを提示しておきたい。

- ① 辞書を活用すること／②構文を分析すること／③「声」を理解すること／④心理を理解すること／⑤文体を理解すること／⑥精読することの意義

2.4 文体論(Stylistics)の視点と複文理解

文体論(Stylistics)が言語学と文学研究の境界領域に位置する両者の架け橋であり、ラングというよりはパロールを問題にする点から判断すると、英文読解や英作文といった英語教育と相性がよく、それに活力を与えることができるとの期待を抱かせる研究分野であることは間違いがない。一連の文章表現を並置関係や均衡関係といった文体論的視点から眺めてみると、なぜそのような文章が産出されているのかを理解し、より深く作者の意図を汲み取ることができ、それは優れた翻訳へと導いてくれるであろう。

次の事例では、複雑な文における文構造の理解(主部と述部の見究めや SVC 型結果構文の表わすイメージ)と、文章全体を俯瞰して得られるパラレル構造の理解ができないと十分に意味を把握することができない⁵⁾。

事例 1 Those therefore who from idealistic reasons **desire profound changes in our social system** and **a great increase of social justice** / must hope that other forces than evil will be instrumental in bringing the changes about.

(B. Russell: Envy, *The Conquest of Happiness*)

※長めの主部と述部の位置を理解し(上の例ではスラッシュで明示)、主部の関係節中の

動詞 **desire** に後続する2つの平行な目的語名詞句構造を見抜けないと英文構造を正確に読み取ることができない。

事例2 **While it is true that** envy is the chief motive force leading to justice as between different classes, different nations, and different sexes, **it is at the same time true that** the kind of justice to be expected as a result of envy is likely to be the worst possible kind; namely, that which consists rather in diminishing the pleasures of the fortunate than in increasing those of the unfortunate. (B. Russell: Envy, *The Conquest of Happiness*)

※このパッセージを構成する2つの大きなシンメトリ構造(While ..., it is...)を理解し、最終部の関係節中の平行な比較構造を見抜けないと英文構造を正確に読み取ることができない。

事例3 One hapless couple **found themselves hauled before magistrates for no graver offense than** being found “sitting together on the Lord’s Day, under an apple tree.” (B. Bryson, *Made in America*)

※「気がついてみると自分達が判事の前に引っ張り出されていた」という SVC 型結果構文を理解し、多義前置詞 **for** の機能が「理由(…の咎で)を表わす」ことを理解し、その理由が **no + 比較級 + than** 構文で表現された「たかが **than** 以下程度の重大でも何でもない規則違反(の咎で)」と理解することによって初めて正確な読みが可能となる。これは、第 2.1 節で述べた外山正一定義の「直訳」による原文の妙味を伝える翻訳が求められる好例。

結言

本稿は、主にボランティアまたは初級の通訳翻訳者にとって必須と思われる基礎知識をまとめたものであり、一種の「テキスト」の役割を果たすことも意図して、そこに学会発表や講演で得られた最新の情報も部分的に盛り込み、平易な文体で記述した。

本稿では、通訳に関する基礎知識と実践に重きを置いたため、翻訳に関する基礎知識と実践についての記述とのバランスが悪いものになったが、後者については回を改め、多様な翻訳論及び翻訳研究に基づいて《承前》として記述する必要がある。

通訳も翻訳も **Source Language**(起点言語)から **Target Language**(目標言語)への転換であることに相違はなく、オーラル面を強調したものが通訳、リテラル面を強調したものが翻訳ということになろう。従って、全体を大括弧で **Translation** と称して、前者を **Interpretation** と呼ばずに、**Voice Translation** や **Speech Translation** と呼ぶことも可能である。ただし、**Interpretation** と表現する場合の含意、すなわち、そこに話し手の発言に対する「解釈」が存在し、経験知や百科辞書的知識に基づく「予測性」が存在することに留意しなければならない。自動音声翻訳ソフトによる機械翻訳を意味することが多い **Voice Translation** にその響きはない。**Interpreter** が複言語による意思伝達場面において **Facilitator** の役割を担っている点とは対照的であることを附言して、本稿の結びとしたい。

註

- 1) 通訳に誤訳は不可避である。アポロ 11 号月面着陸の同時中継において、N. アームストロング船長の発した第一声“**That's one small step for [a] man, one giant leap for man(kind)**”を西山千は雑音の多い厳しい状況下で「これは人類にとって…」と訳したが、実際には「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である」と後に訂正された。弱形で発話される英語の冠詞の難しさを物語るエピソードでもある。
- 2) 通訳上級者になると、この **Waiting**(待ち)ができるようになる。かつて、通訳トレーニングにおいて、英語から日本語への訳出では「もどり訳」は避けるべきであるとの指導もなされたが、**Waiting**ができるようになると、“**I think living in Japan is obviously very different from living in Australia**”を「私思いますのに、日本で住むことは明らかに違ってきますよ、豪州で住むこととは」というような不自然で聞き苦しい日本語を産出することはない。また、通訳者が余裕をもって **Waiting** できるには、話し手の発言の方向性に対する **Anticipation**(予測)を立てるだけの経験知や百科辞書的知識が必要になる。
- 3) 新崎隆子(2017)「聞き手の視点から見た同時通訳と逐次通訳」(日本通訳翻訳学会第 18 回大会 2017.9.9)研究発表資料は同女史から直接ご恵贈戴いた。ここに改めて謝意を表したい。
- 4) これに続く段落の説明は大森(2014: 70)と内容が重複する。
- 5) 事例 1 及び事例 2 については、大森(2018: 258-9)参照のこと。

参考文献

- 安西徹雄・井上健・小林章夫 [編](2005)『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社。
- Gile, D.(2001)“Consecutive vs. Simultaneous: Which is more accurate?” *Interpretation Studies*, No. 1, pp.8-20.
- 小松達也(2005)『通訳の技術』研究社。
- 國弘正雄(1983)『異文化のかけ橋として』(國弘正雄自選集 1) 日本英語教育協会。
- 水野 的(2015)『同時通訳の理論』朝日出版社。
- 中村 捷(2016)『名著に学ぶ これからの英語教育と教授法』開拓社。
- 大森裕實(2013)「前置詞の英文法研究」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第 45 号 pp. 67-81.
- 大森裕實(2014)「転移修飾(Transferred Epithet)に関する言語学的考察」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第 46 号, pp. 69-82.
- 大森裕實(2018)「英語複文構造理解のための関係節考」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第 50 号, pp. 257-270.
- 斎藤兆史(2000)『英語の作法』東京大学出版会。
- 斎藤兆史(2007)『翻訳の作法』東京大学出版会。
- Simpson, P.(2014) *Stylistics: A Source Book for Students*, 2nd ed. Routledge.
- 新崎隆子(2001)『通訳席から世界が見える』筑摩書房。
- 新崎隆子(2017)「聞き手の視点から見た同時通訳と逐次通訳」(日本通訳翻訳学会第 18 回大会 2017.9.9)研究発表資料。
- 袖川裕美(2016)『同時通訳はやめられない』平凡社。
- 鳥飼玖美子(2007)『通訳者と戦後日米外交』みすず書房。

鳥飼玖美子 [監訳] (2009) 『翻訳学入門』 みすず書房. (org. Franz Pöchhacker, *Introducing Interpreting Studies*, 2004)

豊田昌倫・堀正広・今林修 [編著] (2017) 『英語のスタイルー教えるための文体論入門』 研究社.

柳父章・水野的・長沼美香子 [編] (2010) 『日本の翻訳論ーアンソロジーと解題』 法政大学出版会.

Wales, Katie (2011) *A Dictionary of Stylistics*, 3rd ed. Routledge.